

柝の実

泉鏡花

青空文庫

朝六つの橋を、その明方に渡つた——この橋のある処は、いま麻生津という里である。それから三里ばかりで武生に着いた。みちみち可懐い白山にわかれ、日野ヶ峰に迎えられる、やがて、越前の御嶽の山懐に抱かれた事はいうまでもなからう。——武生は昔の府中である。

その年は八月中旬、近江、越前の国境に凄しい山嘯の洪水があつて、いつも敦賀——其処から汽車が通じていた——へ行く順路の、春日野峠を越えて、大良、大日枝山岨を断崖の海に沿う新道は、崖くずれのために、全く道の塞つた事は、もう金沢を立つ時から分つていた。

前夜、福井に一泊して、その朝六つ橋、麻生津を、まだ山かつらに月影を結ぶ頃、霧の中を俥で過ぎて、九時頃武生に着いたのであつた。——誰もいう……此処は水の美しい、女のきれいな処である。柳屋の柳の陰に、門走る谿河の流に立つ姿は、まだ朝霧をそのままの萩にも女郎花にも較べらるる。が、それどころではない。前途のきづかわしきは、俥もこの宿で留まつて、あとの山路は、その、いずれに向つても、もはや通じないと言うのである。

茶店の縁えんに腰を掛けて、渋茶を飲みながら評議をした。……春日野の新道しんみち一条ひとすじ、勿も論ちろん不可いけない。湯ゆの尾峠おにかかると山越え、それも覚おぼ束つかない。ただ道は最も奥で、山は就なかん中ずく深いが、柄とちのき木峠なかから中の河内かわちは越せそうである。それには一週間ばかり以来このかた、郵はま便物べんぶつが通ずると言うのを聞くさえ、雁かりの初はつだよりで、古むかしの名将、また英雄が、涙に、誉ほまれに、屍かばねを埋め、名を残した、あの、山また山、また山の山路を、重かさなる峠を、一羽いちわでとぶか、と袖そでをしめ、襟えりを合わせた。山さん霊れいに対して、小こさな身体からだは、既に茶店の屋根を覗のぞく、御嶽みたけの顛あじに吞くまれていたのであつた。

「気をつけておいでなせえましよ。」……躓なわては荒れて、洪水でみずに松の並木も倒れた。ただ畔あぜのような街道かいどう端はたまで、福井の車夫は、笠を手にして見送りつつ、われさえ指かたす方かたを知らぬ状さまながら、式かたばかり日にやけた黒い手を挙げて、白雲しろくもの前途ゆくてを指した。

秋のはじめの、空は晴れつつ、熱い雲のみ往来して、田に立つ人の影もない。稲も、畠はたも、夥おび多ただしい洪水のあとである。

道を切つて、街道を横に瀬をつくる、流ながれに迷つて、根こそぎ倒れた並木の松を、丸木橋とよりは筏いかだに踏ふんで、心細さに見返ると、車夫くるまやはなお手て廂びさしして立っていた。

翼つばめをいためた燕つばめの、ひとり地ちずれに辿たどるのを、あわれがって、去りあえず見送っていた

のであろう。

たださえ行悩むのゆきなやに、秋暑しという言葉は、残暑の酷きびしさより身にこたえる。また汗の目に、野山の赤いまで暑かった。洪水でみずには荒れても、稲葉いなばの色、青菜の影ばかりはあるうと思うのに、あの勝山かつやまとは、まるで方角が違うものを、右も左も、泥の乾いた煙草たばこばで、喘ぐ息あえさえ舌からに辛い。

祖母が縫かばんがわりってくれた鞆代さらさ用の更紗さらさの袋を、斜はすつかいに掛けたばかり、身は軽いはすが、そのかわり洋傘こうもりの日影も持たぬ。

紅葉こうよう先生は、その洋傘が好きでなかった。遮さへぎらなければならぬ日射ひざしは、扇子おうぎを翳かぎされたものである。従たれつて、一門の誰たれかれが、大概たいがい洋傘を意に介あしない。連れて不しのばず忍しのばずの蓮見はすみから、入谷いりやの朝顔などというみぎりは、一杯かたほおのんだ片頬かたほおの日影に、揃おうぎつて扇子おうぎをかざしたのである。せすともいい真似まねをして。……勿論、蚊かを、いや、蚊帳かやを曲こして飲のむほどのものが、歩ある行くに日よけをするわけはない。蚊帳かやの方は、まだしかし人ひとぎきも憚はばかるが、洋傘おおいばりの方は大威張おおいばりで持たずに済んだ。

神楽坂かぐらざか辺かへんをのすのには、なるほど（なし）で以もつて事は済むのだけれども、この道中には困却こんけつした。あまつさえ……その年は何処どこも陽氣やうきが悪わるかったので、私は腹はらを痛いためていた。

祝儀らしい真似もしない悲しさには、柔い粥とも誂えかねて、朝立った福井の旅籠で、むれ際の飯を少しばかり。しくしく下腹の痛む処へ、洪水のあとの乾早は真にこたえた。鳥打帽の皺びた上へ手拭の頬かむりぐらいでは追着かない、早や十月の声を聞いていたから、護身用の扇子も持たぬ。路傍に藪はあつても、竹を挫き、枝を折るほどの勢もないから、玉江の蘆は名のみ聞く、……湯のような浅沼の蘆を折取つて、くるくるとまわしても、何、秋風が吹くものか。

が、一刻も早く東京へ——唯その憧憬に、山も見ず、雲も見ず、無二無三に道を急いで、忘れもしない、村の名の虎杖に着いた時は、杖という字に縫りたい思がした。——近頃は多く板取と書くのを見る。その頃、藁家の軒札には虎杖村と書いてあつた。

ふと、軒に乾した煙草の葉と、蕃椒の間に、山駕籠の煤けたのが一挺掛つた藁家を
見て、朽縁へと掛けた。「小父さんもう歩行けない。見なさる通りの書生坊で、相
当、お駄賃もあげられないけれど、中の河内まで何とかして駕籠の都合は出来ないでしよ
うか。」「さればの。」耳にかけた輪数珠を外すと、木綿小紋のちゃんちゃん子、経肩
衣とかいって、紋の着いた袖なしを——外は暑いがもう秋だ——もつくりと着込んで、
裏納戸の濡縁に胡坐かいて、横背戸に倒れたまま真紅の花の小さくなった、鳳仙花

の叢を視めながら、煙管を横銜えにしていた親仁が、「膝ずるりと摺って出て、「一
 肩遣つても進じようがの、対手を一つ聞かなくては、のう。」「お願いです、身体もわ
 るし、……実に弱りました。」「待たつせえ、何とかすべい。」お仏壇へ数珠を置くと、
 えいこらと立つて、土間の足半を突掛けた。五十の上だが、しゃんとした足つきで、石
 碓道を向うへ切つて、樗の花が咲き重りつつ、屋根ぐるみ引傾いた、日陰の小屋
 へ潜るように入った、が、今度は経肩衣を引脱いで、小脇に絞つて取つて返した。「対手
 も丁度可かつたで。」一人で駕籠を下すのが、腰もしゃんと楽なもので。——相棒の肩も
 広い、年紀も少し少いのは、早や支度をして、駕籠の荷棒を、えッしと担ぎ、片手に
 ——はじめて視た——絵で知つたほぼ想像のつく大きな蓑虫を提げて出て来たのである。
 「ああ、御苦労様——松明ですか。」「えい、松明でや。」「途中、山路で日が暮れま
 すか。」「何、帰りの支度でや、夜嵐で提灯は持たねえもんだで。」中の河内まで
 は、往還六里余と聞く。——駕籠は夜をかけて引返すのである。
 留守に念も置かないで、そのまま駕籠を昇出した。「おお、あんばいが悪いだね、冷え
 てはなんぬえ。」樹立の暗くなつた時、一度下して、二人して、二人が夜道の用意をした、
 どんつくの半纏を駕籠の屋根につけたのを、敷かせて、一枚。一枚、背中に当がつて、

情なさけに包んでくれたのである。

見上ぐる山の巖いわはた膚だから、清水は雨したたに滴たつて、底知れぬ谷暗く、風は梢こずえに渡りつつ、水は蜘蛛手くもてに岨そばを走はつて、駕籠は縦たになつて、雲を仰ぐ。

前さきほう棒ぼうの親仁おやじが、「この一山ひとやまの、見さつせえ、残らず柄とちの木の太木おもとでや。皆五抱いつつかかえ、七抱ななかかえじや。」森しんしん々としたもんでがんしようが。」と後あとほう棒ぼうが言ことばを添そえる。「いか

な日ひにも、はあ、真夏の炎天えんてんにも、この森で一度雨の降らぬ事はねえの。「清水しみずくの雫しずくかつ迫せまり、藍あいしま縞あわせの袖そでも、森林しんりんの陰かげに墨すみぞめ染ぞめして、襟えりはおのずから寒さかつた。――

「加州家かしゅうけの御先祖おんせんぞが、今の武生たけふの城しろにござらした時から、斧おの入れずでの。どういふものか、はい、御維新ごいしん前まへまで、越前えちぜんの中で、此処ここ一山ひとやまは、加賀領かががでござったよ——お前様まへさまなつかしかんべい。」「いや、僕は些ちつとでも早く東京とうきょうへ行きたいんだよ。」「お若いで、えらい元気じやの。……はいよ。」「おいよ。」と声を合あわせて、道割みちわれの小滝せうたきを飛とんだ。

私は駕籠かごの手に確しかと絶すつた。

草くさに巨人きょじんの足跡あしあとの如ごとき、杳形くつがたの峯みねの平地ひらちへ出でた。巒らん々らん相迫あひせまつた、かすかな空そらは、清朗せいりやうにして、明碧めいへきである。

山氣さんきの中に優しい声こゑして、「お掛かけなさいましな。」軒いは巖いわを削くれる如ごとく、棟むね広く柱はしら黒くろ

き峯の茶屋に、木の根のくりぬきの火鉢を据えて、畳二畳にも余りなん、大熊の皮を敷いた彼方に、出迎えた、むすび髪の色白な若い娘は、唯見ると活けるその熊の背に、片膝して腰を掛けた、奇しき山媛の風情があつた。

袖も摩く。……山嵐颯として、白い雲は、その黒髪の肩越に、裏座敷の崖の欄干に掛つて、水の落つる如く、千仞の谷へ流れた。

その裏座敷に、二人一組、別に一人、一人は旅商人、二人は官吏らしい旅客がいて憩つた。いずれも、柳ヶ瀬から、中の河内越して、武生へ下る途中なのである。

横づけの駕籠を覗いて、親仁が、「お前さま、おだるけりや、お茶を取つて進ぜますで。」「いいえ出ますから。」

娘が塗盆に茶をのせて、「あの、栃の餅、あがりですか。」「駕籠屋さんたちにもどうぞ。」「はい。」——其処に三人の客にも酒はない。皆栃の実の餅の盆を控えていた。娘の色の白妙に、折敷の餅は渋ながら、五ツ、茶の花のように咲いた。が、私はやっぱり腹が痛んだ。

勘定の時に、それを言つて断つた。——「うまくないもののように、皆残して済みません。」ああ、娘は、茶碗を白湯に汲みかえて、熊の胆をくれたのである。

私は、じつと視て、そしてのんだ。

栃の餅を包んで差寄せた。「堅くなりましようけれど、……あの、もう二度とお通りにはなりません。こんな山奥の、おはなしばかり、お土産に。——この実を入れて搗きますのです、あの、餅よりこれを、お土産に。」と、めりんすの帯の合せ目から、ことりと拾って、白い掌で、こなたに渡した。

小さな鶏卵の、軽く角を取って扁めて、薄漆を掛けたような、艶やかな堅い実である。

すかすと、きめに、うすもみじの影が映る。

私はいつまでも持つている。

手箆筒の抽斗深く、時々思出して手に据えると、殻の裡で、優しい音がする。

青空文庫情報

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2001（平成13）年2月5日第21刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十七卷」岩波書店

1942（昭和17）年10月初版発行

初出：「新小説」

1924（大正13）年8月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：米田進、鈴木厚司

2003年3月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柎の実

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>